

宮崎汎会員が見た世界の旅第2部人物編第34話

卓越した政治家リー・クアンユー シンガポール

シンガポールには数えてみると1983年以来公務で7回訪れている。同国は小さな国家であるが、訪れるたびごとに街は目を見張るほどの変貌を遂げている。



1988年のシンガポールの街並み

1980年代のアジア地域は欧米先進国と比較すると、経済的に大きな格差があった。唯一日本だけが高度経済成長を謳歌し、世界各国から注目を浴びていた。

当時経済大国のアメリカから日本的経営の本質は一体何かをテーマに掲げ調査団がやってくるほどであった。マレーシアのマハティール

首相はいちはやく日本に注目し「ルックイースト」＝日本に学べと大号令をかけていた。シンガポールのリー・クアンユー首相も競い合うように、日本の様々なシステムを取り入れ、特に日本の経済成長を支える基本は生産性運動にありと、新たに「生産性庁」を設置し、国を挙げて運動に取り組む姿勢を強く打ち出した。

日本の生産性本部の協力のもとに200名に及ぶ企業経営や経済の専門家を招き、2年間にわたって指導を受けた。一方では国民の意識を高めるためTVを使い国民向けに生産性について大々的なキャンペーンを行うなど、リー・クアンユー首相の素早い意思決定や実行力には目を見張るものがあった。

1990年の初めアメリカのゴア副大統領が進める情報ハイウェイ構想が世界の注目を浴びた。かつてアメリカは全米に高速自動車道路(ハイウェイ)を建設し車社会を実現したが、今度は情報基盤整備に力を入れ情報ハイウェイ、情報のネットワーク構築に取り組んでいた。世界の国々も来るべき情報化社会を目指し、官民力を合わせ懸命な努力をしていた。一方日本の情報化の立ち遅れは如何ともしがたくアジア諸国にも水をあけられていた。このような状況に日本生産性本部は危機感を抱き、アジア諸国の中で情報先進国であったシンガポールの情報化について学ぼうと大きなイベントを企画し、メインスピーカにリー・クアンユー首相を招くこととなった。同国の生産性庁設立に力を貸した日本生産性本部の会長はリー・クアンユー首相とは旧知の仲であるので早速来日の要請をした。しかし首相の返事は、「情報化については最早日本に学ぶことはない。別件なら協力したいが・・・」というものであった。会長は苦笑いしながら情報化社会について日本は後れを取っている。理由は

諸官庁の縄張り意識、既得権益、規制緩和などハードルは高いが改革しないと世界から日本は置いていかれる。一刻も早く日本も取り組みを開始せねばならない。これは新しい生産性運動の大きな使命であると厳しい顔で居並ぶ職員に告げたのである。

今日まで目覚ましい発展を遂げているシンガポールの歴史は、7世紀ごろには海の町として知られ、14世紀にはシンガプーラ（＝サンスクリット語でライオンの町）と呼ばれた。



シンガポールのシンボル マーライオン像

時は大航海時代を迎えヨーロッパ各国がアジアへ進出してきた。1819年インドに本拠を置くイギリスの東インド会社の社員トーマス・ラッフルズが当地にやってきて植民地とし、シンガポールと名称を改め開発にあたった。現在に至るもラッフルズは格式あるホテルの名称や地域にその名を残している。

明治初期には日本人街もできシンガポールには、からゆきさんと呼ばれる日本人女性が600人もいたそうだ。1942年日本の軍事的侵攻により、華人を中心とする排日運動に対し、日本軍は虐殺手段をとるなどの暴挙に出た。

大戦後は再びイギリス領となったが1965年シンガポールは独立を果たした。

シンガポールの独立から今日の発展に至る過程では、リー・クアンユーという優れた政治家に負うところが非常に大きい。

政治家リー・クアンユーは1923年、清朝時代の広東省からイギリスの植民地であったシンガポールへ移民してきた客家の華人4世として生まれた。彼の家系は英語を話す一族で英語名はHarryといった。

シンガポールで教育を受ける途上、太平洋戦争が始まり、日本軍のシンガポール占領などで学業が中断された。彼は一時日本軍のため敵対する連合軍の通信を傍受しその翻訳に携わっていたこともあるそうだ。

戦争終了後、イギリスのケンブリッジ大学で法律を学び1949年首席で卒業し弁護士となる。弁護士事務所の上司が選挙に立候補しその手伝いをし、以来政治に関心を持つようになる。イギリスはシンガポールの独立に対し、厳しい対応を行い多くの人々を逮捕弾圧した。

リー・クアンユーはこれら人々のために弁護活動を積極的に行った。

1954年リー・クアンユーは自ら人民行動党を結成する。この頃マレーシアはイギリスから独立をする。

1959年の総選挙では人民行動党は51議席のうち43議席を獲得する大勝利を果たす。彼はイギリス統治下ながら外交防衛以外の権限を持つシンガポール自治州の首相に押された。1963年シンガポールは独立したマレーシアの一員となったが、マレーシアはマレー人優遇策をとったため華人は反発し1964年双方がぶつかり死傷者がでる騒ぎとなり、もはや平和的な解決は困難となり、遂にはリー・クアンユーのマレーシアに留まるべきとの決意にもかかわらずマレーシア側から絶縁状を突き付けられ、止む無くマレーシアからの分離に合意し、1965年8月9日を持ってシンガポールは独立宣言をしたのである。

シンガポールには水を始めとする資源はまったく無く課題山積の船出であったが、世界に向けての認知を得るため、さっそく1965年9月には国連に加盟した。

リー・クアンユーは近隣諸国との関係を重視し、彼が呼びかけてASEANを設立した。

またシンガポールは華人、マレー人、インド人、アラブ人等々の混在する多民族国家の性格上、特に宗教や人種の対立を防ぐ法整備をし、同時に国防にも力を注いだ。

1990年11月、長年シンガポールを率いてきた首相の座を降り、内閣顧問に就任するも晩年に至るまで絶大な影響力を保持していたが、2015年3月23日死去した。これまでの功績をたたえ国葬で送られた。

余談) 1970年代に国土の狭いシンガポールは海を埋め立て、ハブ空港を建設するため、日本の建設大手企業である大林組が埋め立てを請負、友人が責任者として赴任した。現在のチャンギ空港である。お粗末極まりない日本の空港を後にして、チャンギ空港に降り立った時は、旅行者に至れり尽くせりの完備した施設と設備の大きさに思わず目を見張ったものである。後日友人に話すと俺が造ったんだからな、と誇らしげに語った顔が忘れられない。

1994年情報化社会実現のために日本生産性本部は「情報新世紀会議」を立ち上げ、事務局を総括することを命ぜられた。座長は財界の大物である秩父セメント（のち太平洋セメント）の諸井虔会長、副座長は経済界から椎名武雄日本IBM会長。労組からは鷲尾悦也連合会長。学界からは公文俊平国際大学教授のほか、メンバーは各界のオピニオンリーダー約50名にお願いした。喧々諤々の末ようやく提言がまとまり、羽田孜・村山富市両総理大臣あてに提出した。

提言作成の過程では某省からの軋轢はひどく、真夜中の2時、3時にしばしば電話のベルを鳴らすなどひどい嫌がらせが続いた。時になじられ、「まるで恫喝ではないか」というと、臆面もなく恫喝しているのだから言うことをきけと睨みつけるなど信じがたい行為が続いた。某新聞社から多分ひどい仕打ちをされていると思うが、しゃべってくれと言われたこともある。座長の諸井氏にだけは報告した。氏からは骨を拾ってやるからめげずにやれとハッ

パかけられた。今では懐かしい日本の情報化に関わる奮戦記である。